『まるごと』コースの授業の進め方とその成果

カンバラエヴァ　チョルポン
カザフスタン日本人材開発センター

１．実践の背景

カザフスタン日本人材開発センター（以下KJC）はJICAにより、市場経済の支援目的で、日本語コース、ビジネスコース、両国の交流・相互理解事業を機軸として2002年9月にカザフスタン経済大学内に創設された。KJCには創設当初から日本語講座があり、初級レベルでは、『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』がメイン教材として用いられた。学期終了時アンケートでは毎回「日本語で話せるようになりたい」、「授業の会話練習が足りない」、「会話能力をアップしたい」というコメントがあった。会話能力を高めるためにアクティビティを用意し、様々な練習を取り入れたが、1年、2年経っても、初中級、中級教材に進んでも学習者のアウトプット能力が向上しなかった。出席率も低く、逆に出席率が80%以上でも試験に合格できず同じレベルを繰り返さなければならないという学習者もいて、日本語学習のモチベーションが下がってきていた。

2011年10月より国際交流基金と日本語講座を共催することになり、JF講座が始まった。国際交流基金より日本語教育専門家が派遣されることになり、講座内容もJF日本語教育スタンダード（以下、JFスタンダード）に準拠するものになった。JF講座は、日本語だけではなく、日本文化をまるごと勉強するものであり、以前にはなかった文化に関する特別授業をカリキュラムに取り入れた。以下にKJCにおける授業の進め方とその結果を報告する。なお、本報告では、2012年秋に『まるごと　日本のことばと文化』(以下『まるごと』)を使ったコースで学習し始めたクラスについて記述している。

２．JF講座の実践

2.1　授業の進め方

(1)『まるごと　入門』～『まるごと　初級２』の授業

本報告の対象クラスは、JFスタンダード準拠教材『まるごと』の「かつどう」編と「りかい」編の両方を勉強する総合コースで、『まるごと　入門』から『まるごと　初級２』では、以下の通り、いろいろな授業の進め方を試してみた。

『まるごと　入門』	「かつどう」編1～10課　⇒「りかい」編１～10課　⇒「かつどう」編11～18課　⇒　「りかい」編11～18課
『まるごと　初級1』	第８課まで：トピック（2課）ごとに「かつどう」編　⇒「りかい」編 ＊「りかい」編は１課につき２コマで実施 第９課以降：1課ごとに「かつどう」編　⇒「りかい」編
『まるごと　初級2』	1課ごとに「かつどう」編　⇒「りかい」編 ＊「りかい」編は１課につき２コマで実施

受講生の意見、教師の感想に基づき、『まるごと　初級１』に入ってからは、文法や漢字の書き方に十分時間をかけ、また学習者がクラス内で作文を書くことができるように、「りかい」編の速度を遅くしたほうがいいということになった。そのため、「りかい」編には「かつどう」編の倍の時間をかけているが、クラスの人数や受講生のレベルなどにより調整している。

⑵『まるごと　初中級』の授業

上記の表に記した『まるごと　初級２』を終えた受講生は、2014年2月から『まるごと　初中級 A2/B1』に入った。以下にクラスの詳細を記す。

レベル	A2/B1
実施コース名	初中級 A2/B1
実施日時または期間	2014年2月17日～2014年6月20日（2014年春学期）
授業時間	120分@１コマ、　２回×16週＝32回
授業担当講師	報告者、　国際交流基金派遣の日本語教育専門家
1クラスの学習者数	16人
学習者の属性	性別：男性4人、女性12人 年齢：10代8人、20代5人、40代2人、50代1人 職業：高校生8人、大学生2人、会社員6人
使用教材	『まるごと　初中級』

『まるごと　初中級』に関しては、1つのトピックを3コマで終えるようにした。

1回目：トピックの準備として語彙の導入、漢字の言葉の確認、会話練習

2回目：会話、スピーチ

3回目：文型、読解、作文

作文は、教科書にはタスクとしてあげられていないが、Can-doに合わせてテーマを設定し、書いてもらった。長さの指定は特にしなかったが、作文の構成については指導した。作文を取り入れた理由は、『まるごと　初級』「りかい」編の授業で毎回作文を書かせた結果、その効果が大きく、受講生が自分の言いたいことを、読み手にわかりやすく書くことができるようになってきていたことがある。また、JF講座を実施する前の受講生は、書くトレーニングをしていなかったため、初級の教科書が終わっても文章を書くのに時間がかかり、書いた文章も読み手が理解するのに苦労する文章だったことから、書くトレーニングの必要性を強く感じていた。そこで、教科書のタスクにはなかったが、作文を取り入れた。

2.2 評価

JF講座では、筆記試験以外にパフォーマンス評価が入っている。KJCの場合、修了者には修了書を発行することから、修了条件が定められている。出席率、中間・期末テストと授業のタスク（漢字シートや作文シート、発表）が点数化され、総合計が60点以上となれば修了書を発行している。

試験問題は『まるごと』にあるサンプルに順ずる形で作成している。『まるごと　初中級』からは「かつどう」編と「りかい」編に教科書が分かれていないので、試験は会話と読解・文法、授業中のタスクとしてスピーチと作文を行った。授業中の発表や作文などのパフォーマンス評価は3段階評価で、当該レベルのCan-doが達成できれば合格点を与えている。また、評価では出席率も重視している。

JF講座ではポートフォリオの導入も特徴の1つであり、KJCでも取り入れている。しかし、カザフスタンではまだあまり普及していないため、本来の使用目的とはかけ離れた、個人の学習成果物のファイルとしての利用にとどまっている。ただ、ポートフォリオにファイルしたタスクへのフォローアップや、自己評価表を通して受講生と教師とのコミュニケーションも生まれてきている。また、中には自分の日本文化体験を入れる受講生もいる。しかし、依然として、自己の学習管理にまでは至らない。

2.3 補助教材

『まるごと』は、写真、イラスト、音声が充実していて、海外でもそれ1冊で授業ができるように配慮された教材である。それで、KJCでは特に練習問題を用意していない。ただ、語彙はロシア語訳を準備した。これは、KJC のホームページにアップしており、必要な人はプリントアウトして利用している。宿題も出さないが、授業中に終わらなかった課題が後日提出という宿題になることはある。

『まるごと　初級』では漢字練習シートを利用して、漢字の読み書きの確認をしているが、『まるごと　初中級』からは漢字学習は受講生の自主学習としている。また、筆記テストでは、レベルを問わず、漢字の読み方を問う問題はあるが、書き方を問う問題はなく、漢字テストも行っていない。

なお、JLPTを意識している受講生には、KJCの図書館の問題集を紹介している。

2.4 特別授業

(1) 文化体験

受講生から日本人と一緒に何かしたいという希望が出たので、新しい試みとして料理を取り入れた。『まるごと　初級2』のクラスでは、トピック「外で食べる」が終わってから、トピックで扱われていた「すき焼き」を日本人協力者と一緒に作った。授業で学んだ日本語を実際に使ってみることによって、受講生は自分の日本語に自信を持つし、日本文化への理解をさらに深め、学習継続の大きなモチベーションともなる。料理は非常に好評で、自分の家で家族に作ってあげたという受講生もいた。また、『まるごと　入門』では、日本人宅訪問（第8課）の場面を作って、日本人宅への訪問と自分の家に日本人を招くロールプレイも行っている。さらに、教科書で紹介された「風呂敷」や「茶道」も体験してもらった。

⑵ ビジターセッション

日本語を使う機会が少ないので、KJCは、コース期間中に1回1-2名の日本人をクラスに呼び、話す機会を提供している。以前のビジターセッションでは、基本的にフリートークという形で行われた。受講生が予めどんなことを話すか考えて、ゲストを囲んで自由に会話を行い、授業の最後にゲストと話し合った感想などをアンケートに記入した。『まるごと』では、文化体験も大切にしているため、新しい形のビジターセッションにした。受講生は4-5名のグループで日本人協力者1名と既習のトピックについて話し合い、準備したワークシートの質問にゲストの答えを記入する。そして、最後に、話し合ったことをグループでまとめて、クラス全体でシェアする。『まるごと　初中級』では、食生活、結婚、外国語学習の体験、旅行でのトラブルなどについて日本人協力者がテーマに関係のある自分の体験を話してくれ、会話を楽しんだだけではなく、楽しくグループで発表を聞くこともできた。新しい形のビジターセッションは「千日一生懸命勉強するよりも、1日日本人と話したほうがためになる」という受講生のコメントもあり、大変好評だったので、今後も続けていきたいと考えている。また、新たに婦人会の協力も得られたので、ビジターセッションのバラエティが広がった。

３．JF講座の効果

3.1 教師の感想

⑴従来の日本語コースとJF講座『まるごと』コースとの比較

『まるごと』コースを2学期間担当した専任講師2名と非常勤講師1名が自分たちの振り返りとして『まるごと』と『みんなの日本語』を比較し、感想を共有した。

初めて『まるごと』を見たときは他の教科書と違ってカラフルで、写真でわかる日本事情が多く、文字が少ない、白黒の教科書よりも興味を引く面白い教科書だという印象を持ったという意見があった。それと同時に「かつどう」編と「りかい」編の2冊は同じトピックで同じような内容で学習者が飽きないのかという心配や、文字が少ない教科書をどう教えたらいいかわからなかったという声もあった。

『みんなの日本語』を使用していたときの活動は、文型を使って作文を書くこと、ドリル練習と役割練習、漢字の読み書きだった。また、話したいという受講生の希望にこたえようと短いダイアログを用意し、会話練習の時間をとったが、受講生のアウトプット能力を引き上げることはできなかった。

『まるごと』では、教材についている音声を聞くこと、音声のリピート、作文、ペアで話すことがメインになった。『まるごと　入門』のときから、作文を書く時間を取った。「りかい」編の教科書はトピックごとに自分の作文を書くようになっていたが、KJCでは、各課で書いてもらった。

受講生は早い段階から書く練習をしていることもあり、従来のコースの受講生よりも自分のことを相手に伝えようという姿勢が強く感じられた。教科書にも「話す」と「書く」のモデルがあるため、受講生は話の進め方や作文の書き方がわかり、文の構造は単純でも、短い文をつなげて長く書けるようになったと考えられる。

⑵教師の変化

『まるごと』の授業では、教師は文法などの説明を控える。これが、以前の教え方と大きく違い、大変だった。「かつどう」編を担当するときになぜ文法を教えないのか、また受講生の文法に関する質問になぜ詳しく答えてはいけないのか、最初は理解できなかった。教師が教えるべきだと教育されてきた私たち現地教師には、文法の細かい説明をせずに授業を進めることはショックだった。文法の説明なしでどの程度学習者が理解できるのかとても心配していたが、学習者に考えるチャンスを与えるように努力した。次第に教師が先に説明するのではなく、受講生が音声を聞いて気づくまで待つことが大切だということがわかってきた。受講生が自分で気づいたことは記憶に残りやすいし、積極的な学習態度を呼び起こす大事なプロセスだとわかった。そして、次第に、以前と違った授業ができるようになった。『まるごと』を教えているうちに、教師は教室の中ではサポートする立場であるということが意識できるようになった。受講生に勉強の楽しみを実感させるためには、教師が自分の教え方を変えなければならないということがわかった。

また、以前のプログラムだと、教師の授業準備の負担が大きかったが、『まるごと』は負担が少なくてやりやすくなる一方、準備することも変わった。例えば、日本の観光地の情報や和菓子、他国の料理の名前など、現地教師が知らない単語が頻繁に出てくるので、事前に調べることが必要になった。また、写真の利用の仕方も変わった。以前はただ写真を見せるだけであったが、今は、そこから日本文化の様々なことが紹介できるようになった。

教科書の問題の答えを確認するときに、ただ答えの確認をするのではなく、それを日本語の発話機会として利用することも覚えた。それは今まで教科書の内容に縛られた正確さを重視する教授法とはまったく違った学習者の発話を引き出すもので、自分自身にとってもプラスになった。さらに、作文の添削の回数を重ねていくうちに、文章の構成や、読み手にわかりやすい文章を書く指導ができるようになってきた。そして、実生活で使えるものを取り上げることの重要性に気がついた。

新しくポートフォリオが導入されたおかげで、受講生とのやり取りができるようになり、お互いにフィードバックが得られるようになった。教師は受講生とより近い関係になり、受講生のレベルをより正確に把握できるようになったと思う。

⑶教師から見た受講生の変化

『まるごと』コースでは音声を多用するため、受講生は日本語を聞くことに慣れており、自然な生の日本語がわかるようになった。『みんなの日本語』と違って、『まるごと　入門』レベルの学習でも既に習った日本語を使って話せる。クラスメートに日本語で質問をしたり、活発にコメントしたりする。受講生の耳は、授業中に音声を聞くことで若い男女からお年寄りまで様々な日本人の声に慣れているし、聞き取りが速い。そのため、日本人と緊張しないで話せる。受講生は聞かれたことのみに答えるのでは

なく、自発的に発言し、知っている日本語で言いたいことや聞きたいことをどんどん伝えたり、尋ねたりする。これは、以前のクラスと大きく変わったことである。

ペアワークやグループワークを通して、受講生がお互いに助け合いながら学び、会話練習をしているときの表情も明るく、クラス内の雰囲気がよくなり、これらは学習の動機付けになっている。また、自分のことや自分の体験を基に話すので、より楽しく授業に参加する姿勢も見られた。

KJC では、授業の終わりに今日の授業がどのくらいできたのか自己評価を Can-Do チェックシートに記入し、振り返る時間を設けている。この作業を通し、受講生は自己評価を意識し、自己評価ができるようになった。

また、作文も比較的長く書けるようになっただけでなく、受講生が教科書にあるモデル文を見ながら、自分や自分の考えをモデル文以上に表現し、既習の日本語を使ってもっと書こうという意欲が見られた。

文化理解では、今の日本を理解し、比較しながら自分の国を振り返り、クラスの友達と話し合う。日本滞在経験のある受講生が自分自身の体験に基づいた詳しい感想をクラスで話すこともあった。

授業外のクラスのまとまりもとても良く、受講生はどんなことでも助け合ったり、誕生日プレゼントを買ったり、みんなで日本レストランやピクニックに行ったりする。そして、KJC のイベントでは、みんなで楽しそうにボランティアをする。それに、授業では接点のない他のクラスの受講生とも仲良くなったり、KJC の仲間たちともっと接してみたい気持ちが沸いてきているようだ。

『みんなの日本語』コースの受講生はインプットしたことを、どうアウトプットすればいいかわからなかった。自分の体験に基づいた話ができなかったし、正しい構成で作文を書くこともあまりできなかった。話す前に文法的な間違いがないかどうかそのことばかり気にしていたため、発話が遅く、話す自信が全くなかった。相手が話していることを理解しても、返事ができず、初級レベルが終わった段階でも非常に限られた簡単な単語レベルの表現しか使えなかった。

『まるごと』を使うことによって、「会話ができるようにならない」という問題を解決できたことを強く強調したい。受講生から要望され続けてきた「話したい」という希望にやっと応えることができた。

3.2 受講生の声

(1) アンケート結果から

JF 講座では、各学期の終了時に受講生にコースに関するアンケートを実施し、母語で回答してもらっている。表１と表２は 2012 年秋に『まるごと』コースで学び始めた JF 講座１期生のアンケート結果である。表１はアンケートの質問項目の１つである自己目標達成度の推移を表したものである。

表１：目標達成の有無

回数	実施	レベル	回答者数	できた	できなかった	できた(%)	できなかった(%)
1	2012 年 6 月	『まるごと　入門』「かつどう」編終了、「りかい」編前半終了	34	24	1	71	3
2	2013 年 1 月	『まるごと　入門』「りかい」編後半終了『まるごと　初級１』前半終了	21	18	0	86	0

3	2013年 6月	『まるごと　初級１』後半終了	19	19	0	100	0
4	2014年 1月	『まるごと　初級２』 前半終了	13	13	0	100	0
5	2014年 6月	『まるごと　初級２』後半終了 『まるごと　初中級』前半終了	8	8	0	100	0

目標達成度を問う質問で、初回は達成できた人が71%であったが、2回目は86%、3回目以降は100%が「達成できた」と回答している。この結果から、受講生のニーズとコース目標が一致していると言うことができる。さらに、教科書やコース内容も、受講生がそれぞれの目標を無理なく達成できるようになっていると考えられる。つまり、JF講座の1期生には『まるごと』コースが有効であり、高い満足度を得られた内容であったと言える。

どんな能力を身につけたかという質問に対する記述回答からは、表２のような推移が見られた。

表２：身につけた能力（報告者訳）

	『まるごと　初級１』	『まるごと　初級２』	『まるごと　初中級　』
話す	・速く話す ・意見が伝えられる ・日常的な会話（習ったトピックに限る） ・日本人と話すとき緊張しないで普通に話せる ・話し合う ・話す能力	・話す能力 ・話すスピード ・自分の意見を広く伝えられる	・比較的自由に会話できるようになった ・語彙が増え、コミュニケーションできる
書く	・作文を書く	・作文が書きやすくなった	

話す能力を見ると、『まるごと　初級１』では「意見が伝えられる」という回答だったが、『まるごと　初級２』では「自分の意見を広く伝えられる」というように、受講生自身も自分の能力の向上を意識していることがわかる。『まるごと　初中級』になると「自由に会話できる」という回答になり、更なる能力の向上がうかがえる。

作文に関しても同じような結果が見られた。『まるごと　初級１』から『まるごと　初級２』になると、「作文が書きやすくなった」と言っている。これも、語彙の広がり、文章の構成力が付いたからではないだろうか。

⑵「KJC NEWS」から

KJCでは、2006年から季刊誌「KJC NEWS」を発行している。日本語コーナーにはJF講座の受講生にも記事の寄稿を依頼している。2014年春号では、JF講座の1期生の以下のような声がある。

受講生１

コースは非常に興味深く、様々なイベントもあった。教室では、多くの視点から日本語を知ることができた。今、私たちは自分自身について以前よりもより詳しく話すことができる。また、日本料理の作り方と食事のマナーなどを習った。コースのおかげで、将来日本に行っても困らないと思う。旅行のトピックで沖縄の観光スポットを知った。この夢のような島や京都について色々知った。私もいつか行ってみたい。日本の特別な日についても勉強し、私たちは日本文化に一歩近づいた。また、日本のサイトを利用できるように、ネットショッピングも勉強した。これは、とてもためになるテーマだと思う。JF 講座のプログラムのおかげで自分の日本語がとても上達したと思っている。『まるごと』コースで勉強できることはとても嬉しいし、日本語の習得にも効果的だと思う。私の日本語のノートには、私たちが教室で学んだことについて、たくさんのことが書いてある。このノートは私の宝物である。日本から離れていても、日本にいるかのように感じられることが JF 講座の素晴らしいところである。（報告者訳）

受講生２

私自身、英語とスペイン語を話すので、それらと根本的に異なる言語を学ぶことは非常に興味深かった。『まるごと』のプログラムは教室で勉強したことをすぐに実際の場面で使用できる構成になっているので、そのことに驚いた。私は１年半しか日本語を勉強していないのに、日本に行ったら簡単に日常会話ができると思う。それは、私たちがカザフスタンにいても日本を感じることができるからだ。私も英語とスペイン語の教師をしているが、授業中に教師から聞く興味深い話が、勉強したことをさらに身近に感じさせてくれると、改めて思った。JF 講座のおかげで、私は日本のライフスタイルについていろいろ知ることができている。私はこんな KJC の教師と日本語が勉強できることを、本当に嬉しく思う。これからも日本語を勉強し続けたい。（報告者訳）

２人の受講生のコメントからも、JF 講座の受講生が楽しみながら、様々なことを身につけていることがわかる。また、最終目標は日本語ではなく、日本語を手段として何かしたいと考えていることもうかがえる。

４．今後の課題

(1) JLPT とのリンク

JLPT は JF スタンダードとリンクしていない。JF スタンダードは A1-C2 の 6 レベルであるが、JLPT は N5-N1 の 5 レベルであり、JF スタンダード準拠教材の『まるごと』で勉強している学習者はどこまで学習したら、どのレベルに合格できるかわかりにくい。本報告の対象クラスは、『まるごと　初中級』に入ったので、JLPT 受験を奨励していこうと考えている。しかし、『まるごと』と JLPT をリンクさせるのはなかなか容易ではない。将来的に JLPT も 6 レベルとなり JF スタンダードとリンクするようになれば、『まるごと』で日本語を勉強している人たちも JLPT を１つの目標とすることが可能となり、受験者も増えるのではないだろうか。

KJCは、JLPT受験者数の増加につながるような取り組みもしていく必要があると考えている。具体的には、合格体験談の紹介、JLPT体験のクラスを用意することなどを検討している。

⑵JF講座の良さを紹介すること

『まるごと』の紹介、JF講座の実践内容を外部に向けて発信することを目的として、KJCでは、現役の教師と教師希望者を対象に研修を2回実施した。JFスタンダードの利用法についての説明、『まるごと』の説明、授業見学(「かつどう」編)、座談会という内容で、授業見学を通して学習者の変化を実感してもらった。研修終了時のアンケートでは、内容に対して「非常に満足」「満足」との回答を得た。その他、以下のようなコメントが寄せられた。

・大学と違って聴解が多い。
・リスニングに慣れている。
・正しい文章を話す学習者が多いように感じた。
・勉強した文型などはきちんと使える。
・学習者が自分の経験を話す。それは教室外でもそのまま使える。
・大学では、クラス内の学習者の差が大きいが、このクラスの学習者のレベルの差はあまりないように感じた。
・大学と違って、問題の答えは記号ではなくQ&Aという形で確認する。今後、大学の授業に取り入れたい。
・日本事情もたくさん入っている。

参加者の多くから「『まるごと』を使ってみたい。」「主教材として取り入れたい。」という希望が出た。さらに、「りかい」編の授業も見たいという声があがり、2回目の研修として「りかい」編を取り上げた。すると、次は『まるごと　初中級』の授業見学や研修をしてほしいという要望も出た。

カザフスタンの日本語教師は、JF講座を知ることによって、従来の授業を省みるきっかけをつかめるのではないだろうか。今後も、カザフスタンの日本語教師のレベルアップのため、JF講座を実施しているKJCが中心となり、『まるごと』研修会を企画、実施していきたいと考えている。

⑶ 新規受講生の獲得

カザフスタンでは、ここ数年日本語学習者が減少傾向にある。KJCでも、新規学習者が思うように増えず、苦労している。これは、カザフスタンが韓国との結びつきが強く、現在韓国との間に相互ビザ免除協定が結ばれたことも大いに影響があると考えられる。大学間の交流も盛んになり、留学も短期長期問わず、容易にできるようになっている。さらに、韓国センターでは、韓国語講座は無料で受講できる。この影響は、KJCのみならず、各大学にも及んでいる。日本語単独では学科が維持できず、韓国語学科の傘下に入っている大学もある。

日本語のライバルは韓国語だけではなく、中国語もある。中国語は将来の就職を考えると有利な言語であり、中国はカザフスタンの隣国でもある。ビザ免除協定はまだないが、比較的安く留学もできるため、自費留学も増えている。

こういう厳しい状況下で、KJCをはじめ、カザフスタンの日本語教育機関は新規学習者を集めるために四苦八苦している。KJCでは、メディアに広告も出してきたが高料金な割に効果がなかったので、新たにソーシャルネットワークを利用しての広報、バス広告、学校訪問、文化イベント、デモンストレーションクラスをしている。

もう1つの取り組みは、日本関連のいろんな活動を通して、KJCの知名度を上げ、KJCの中のJF講座をアピールすることと考える。2014年夏には、「広島･長崎原爆展」をKJCが請け負い、カザフスタンの3都市で行った。また、初の試みとして「子供のサマーキャンプ」も行った。さらに、日本の日本語学校と協定を結び、KJCと日本のつながりを強調し、日本留学を視野に入れている人を獲得したいと考えている。